

氏名	梶田 勲一 かじ た せい いち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第73号
学位授与の日付	昭和46年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	自己意識の社会心理学的研究—特に対人認知および対人関係の規定因としての自己意識について
論文調査委員	(主査) 教授 園原太郎 教授 野田又夫 教授 池田義祐

論文内容の要旨

対人関係における行動の諸相に、自己意識が深いかわりをもつことは、従来の諸研究によって指摘されてきたが、そのメカニズムに関して一貫した実証的研究は、まだあまり進んでいない。本論文は二者関係に問題をしぼり、自己及び他者の相互認知、相互関係に働らく自己意識の要因が、自己に関する理想像を軸として適格的協和的に作用するものであることを実証した研究である。

論文の構成は2部より成り、第1部では問題の理論的背景を概述する。即ち心理学における自我や自己意識の概念について整理した G. Allport の所論を手がかりに、従来の概念規定の多様性が、この問題の議論を混乱させてきた事情を述べ、認識主体としての自我と認識対象としての自己とを概念上区別しながら、これを並列的に二分する従来の多くの考えかたに疑問を示し、統体的な包含関係で捉えるべきであると主張する。著者によれば自我は有機体そのものであり、その構成の内容をなすものは自己意識であると、その諸相について検討を加える(第1章)。

次いで自己意識の理論的な位置づけとして、James の理論、Rogers の理論、Sarvin の理論、Horney の理論を、夫々古典的分析、現象学派、役割理論、現代精神分析派の代表例にとって概観する(第2章)。更に自己意識と対人関係とについてなされた従来の実証的諸研究を、自己意識と対人関係との関連性、自己意識が社会的行動に及ぼす影響、集団関係の中における自己意識の形成と変容の三領域に分けて概述する(第3章)。

これらの諸研究によって、個人の自己評価と他者に対する一般的な態度との間に密接な関係のあることが明らかにされてきたが、何故そのような関係がみられるのか、そこにはどのようなメカニズムが存在するのかについては必らずしも明らかでないことを指摘し、対人認知および対人関係の規定因としての自己意識の機能について独自の実験的研究を第2部において展開している。

第2部第1章は、集団による受容、非受容が集団への魅力を変動させることについて、自己評価の高低がこの効果を媒介するという、J. E. Dittes の実験を、この種の相互作用の解明に一指を染めたものとし

て評価し、これを二者関係に適用して追試した研究である。然るにその結果は Dittes の示したような相手に対する魅力の変動に自己評価と受容、非受容の交互作用示されず、夫々の主効果のみがみられた。のみならず、実験的に操作した受容、非受容の条件ではなく、被験者によって知覚された受容のレベルで分析した結果では、自己評価の効果が消失した。本実験と Dittes のそれとは条件に多少相異があるけれども、著者はここに、Dittes の基本仮説に疑問を提出し、自己評価の水準は他者に対する態度を規定し、他者と自己との関係の受けとりかたにある偏りをもたらす枠組として働くのではないかという仮定を提起する。

これを更に確かめるための3つの実験が第2章に述べられる。これは自分の行なった特定の業績に対する自他の評価が状況の認知、相手への魅力と如何に関係し、その際自己評価がどのように作用するかを、偏相関値によって分析したものである。その結果は、「他者からの働きかけを認知する際、自己評価を確認するような認知のしかたがなされ、その認知された内容に応じて他者に対する態度、魅力が規定される」という著者の仮説を支持するものであった。

第3章および第4章は、自己評価の水準がなぜこのような認知の仕方を生ずるかを、二者関係における種々の自・他意識の相互関係の中における自己意識の在りかたを分析することによって明らかにしようとする。Self-differential 尺度を用いて、現実の自己と理想像としての自己について評定させるとともに好意をもつ相手と好意をもたぬ相手について自分がどう思うか、相手が自分をどう思うか、相手が相手自身どう思っているか等を評定させ、更にこれに相手自身の自己評定、相手自身による自分への評定等を加え、これらの間の相関表をもととして偏相関値によるその構造連関を分析した。その結果これらの連関の中では理想的自己像が軸的役割をもち、(1)自己評価が高いことは現実自己と理想的自己との一致度の高いことを示し、好意をもつ他者についての評定も自己理想像と高い関連をもってなされる故、これらの間に調和的・適合的な系が成立していること。(2)自己評価が低いものでは、自・他に関する概念が、自己、他者、自己理想像それぞれに分裂し不調和な関係にあること。(3)他者を自己と類同視する傾向として Fiedler らによって提唱されている assumed similarity は、この理想化傾向に依存するものであること。(4)対人感情の主要な効果も理想化傾向であること。(5)他者からどのように見られているかについての推測が、自己評価の高い場合、特に相手に好意をもつときに正確となる傾向にあることも、この理想化傾向に基いて考えれば解決され易いこと等が示された。

これらの結果を通観して著者は、自己意識がどのような点において対人認知および対人関係を規定としているかについて、次のように結論する。

1. 自己意識、特に自己評価のレベルは、対人関係における経験を認知する場合の関係枠として機能する。
2. 自己意識、特に自己評価のレベルは他者に対する態度を規定する。
3. 理想的自己像は、他者に対する好悪感情との関連で、他者に関するイメージの内容を規定する。
4. 自己評価のレベルは、自・他に関する諸概念が調和的であるか、非調和的であるかを規定する。
5. 自己評価の低い人は、対人関係において不適応となる可能性が大きい。

論文審査の結果の要旨

自我や自己に関する問題が、再び現代心理学特に社会心理学や臨床心理学において中心的な問題の一つとして重視されるようになった事情は、著者が概観する通りである。ただそれは仮想的実体や仮設的説明原理として扱われるのではなく、人間行動、特に対人的関係における行動を規定する測定可能な要因として、その規定のメカニズムが問われなければならない。従来自己意識の諸側面について、あるいは特定の自己意識と行動特性とのかわりについての指摘は少なくないが、規定要因としてのメカニズムに関する実証的研究は余り見られなかった。

著者が Dittes の実験の追試を発端として、自己意識特に自己評価の水準が対人魅力の変動に及ぼす効果について、これが対人関係の認知に関係枠として働くのではないかという大胆な仮説を提唱し、爾後の一連の実証的研究によって益々この仮説を確証したのみならず、関係枠としてのメカニズムが理想的自己像を中心とする理想化傾向ともいふべき、価値基準による他者に関する情報の選択、情報相互の関連づけにあり、自他についての調和的關係系の形成であることを提示したことは、評価に値する業績と認められる。

もとより著者の論考には再考を要する点がないではない。例えば自我と自己とを二分的並列的ではなく、機能的な統合において捉えるべきであるというはよいとしても、主体的自我を有機体として客体化しているような点は再考されるべきであろう。又著者自身の実証的研究のデータも、仔細に見れば尚検討を要するものもあり、自他概念の相関値による関連もこれによって対人関係のメカニズムを推定するには、尚多くの変動因とともに考えられなければならぬであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。